告白

2月21日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

2月21日のおはなし「告白」

　本を読み終わろうとしている人を見るのが好きだ。ほっと深いため息をついて本を閉じる人もいいが、終わりまで読み進みたいような、いつまでも本の世界に浸っていたいような、相反する思いに引き裂かれて読んでいる最中の人の切なそうな表情もいい。生真面目な表情で一気に読み切ってしまった直後の、あっと驚いたような顔つきもいい。まるでいきなり足元にぽっかり穴があいてしまったとでもいうような、あるいは、見知らぬ世界に投げ込まれてしまったとでもいうような。

　彼らが何を読んでいるのか、わたしは知らない。それで全然構わない。読んでいるものが何であっても関係ない。別に小説に限らない。ビジネス書でも、ノンフィクションでも、本でさえあれば、それを読み終わる瞬間の人の表情には何とも言えないものがあるのだ。決然とした表情の人は、何か生き方を示唆されたのだろうか。読み終わるなりあわてて前の方のページをめくりはじめた人は巧みな伏線の張られた物語を読んだのだろうか。放心した表情で読み終えた本を片付けもせずにぼうっとしている人はきっと濃密な長編小説でも読んでいたに違いない。そんな推測が当たっているのかどうか、確かめようもないけど。

　電車に乗ると、ほとんど反射的にわたしはいつも本を読んでいる人を探す。最近は携帯電話を手に画面を眺めたり何か入力したりする人の数がすっかり増えてしまって、対照的に本を読む人の数がすごく少なくなってしまったけれど、それでも車輛あたりに少なくとも一人はいる。そういう人を見つけるとわたしは何気なくそのそばに近づく。そしてその本の残りのページ数がどのくらいあるかを見定める。間もなく本を読み終わろうとしているならば、もう決まりだ。わたしはまわりに気づかれずにその人を観察できるポジションを決め、じっと見守る。

　ところで、この残りのページ数の見定めと言うのが思いのほかむずかしくて、最初の頃はずいぶん失敗も多かった。いままさに読み終わろうとしている人だと思って眺めているのに、その先いくらページをめくっても一向に終わらない。そのまま電車を降りてしまう。もう終わりだと思ってからのページ数は意外とあるものなのだ。何度か同じようなミスを重ねてから、そのことにふと気づいて自分の家にある本で「残りわずかなページ数」を再現してみて、確認した。単行本やら文庫本やら新書やらを並べ、紙質の厚めのもの薄めのものなどバリエーションをとりそろえ。

　そうやって確認してみたものの、では残り2ページと残り5ページとを区別できるかというとなかなかむずかしい。ぜひ試してほしいのだが、離れて見るとほとんど差がわからない。本によっては解説ページやら注釈ページやら奥付やらがあるのでますますわからない。本文の残りが1ページと10ページすら区別がつかないかもしれない。解説ページというものも、また、厄介な存在だ。解説ページも含めて、本を読み終わる瞬間の人のたたずまいはいいものなのだが、やはり理想的には本文が肝心だ。その本のメインの部分を読み終える瞬間こそがいいのだ。

　このことは、あまり人には言わないようにしている。大学に入学したばかりの頃のコンパで、受けるかと思って「趣味は本を読み終わる人の顔を見ること」と話したことがあるのだが、大失敗だった。言い方が悪いのかと思って別な機会にもう一度だけ「もうすぐ本を読み終わる人の表情ってなかなかいいんですよね」と言ってみたこともあるが、これも失敗だった。二回とも、何か、とてつもない淫靡な趣味を告白されたような、嫌悪感に満ちた目を向けられた。まるで自分は幼児性愛者だと告白したような。あるいはヤマナメクジをつかまえて顔のパックに使っている様子を実演したかのような。

　でもこれはわたしだけの趣味ではない。むしろわたしはこの道に導かれたのだ。中学高校と寮生活だったが、高2、高3と同室だったルームメイトが先達だった。そのルームメイトこそがこの世界を教えて、わたしの趣味を開花させてくれたのだ。ある日、わたしが本を読み終える様子をじっと見ていたルームメイトにどうかしたかと尋ねると、本を読み終わろうとしている人の様子を見るのが好きなのだと告白された。それを聞いた瞬間にわたしもまさにそれが大好きなこと

[illegible]に気がついた。それまでにも、わたし自身が、しばしばルームメイトが本を読み終える瞬間を見つめていたからだ。

　同性愛ということではないけれど、お互いに同じ性向を持っていることがわかってからのわたしたちの部屋には一種近寄りがたいような空気が漂っていたと思う。わたしたちはそれぞれにお互いが本を読み終わる瞬間を見たくて、同時に見てほしくて、そのために大量の本を読んでいた。他の部屋からは異常な本の虫と呼ばれてからかわれていたが、からかっていた同級生すら、そこにはただ本が好きということを超えた異様な連帯感のようなもので、私たちが結ばれていたことに気づいていたのではないかと思う。それは澄み切った冬の空のように澄明で、同時に息苦しくなるほど官能的で、特別な日々だった。

　けれど、その後二度と同じ趣味を持つ人に会わない。うっかり口にするとド変態扱いされてしまう。だから、そういうわけで、いまわたしには恋人もいないし、恋人を欲しいとも思わないし、ましてや結婚することも考えられない。わたしは誰とも共同生活をする気になれないのだ。なぜなら高校時代のあの2年間が帰ってくるとはとても思えないからだ。あれほど素晴らしい日々をともにできる相手が現れるとは思えないからだ。

（「共同生活」ordered by あやこ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い＆お誘い

　Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？　もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブクログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

　「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそこのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

　現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→公開中の作品一覧

　SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「Sudden Fiction Project Guide」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

　ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、Facebookページなどに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

　読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

　10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「急募！お題　この秋Sudden Fiction Project開催します」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！　はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

　こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

告白

http://p.booklog.jp/book/44778

著者：hirotakashina
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/44778

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/44778

公開中のSudden Fiction Project作品一覧
http://p.booklog.jp/users/hirotakashina

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.